

〈総合診療ボックス〉「誰でもできる緩和医療」

埼玉医科大学客員教授 武田 文和 監修
 東札幌病院副院長 石垣 靖子
 日本バプテスト病院ホスピス長 林 章敏 編集

虎の門病院内科

川 畑 雅 照

最近、巷に緩和医療と題する書物は枚挙にいとまがない。筆者も主治医として癌末期の患者さんを担当することも少なくないため、必要に迫られて緩和医療の教科書をひもとくこともあり、今回本書を手にする機会を得た。本書は generalist を対象としているため堅苦しい表現は少なく、仕事の合間や通勤電車の中で気楽に読み進めることができた。分量も A5 判で 200 頁程度で手ごろであったこともあり 3 日で読了することができた。確かにサイズとしては小振りの単行本であるが、その内容は極めて実務的で充実していた。各章の導入部のチェックリストやイラストもわかりやすく好感が持てた。教育的な症例の提示も交えた構成で読みやすく、意図するポイントが直にベッドサイドから伝わってくる内容であった。これは、「総合診療ボックス」のシリーズ全体を通して感じることだが、編集者の苦心の跡がうかがえる。また、何よりも各論文が緩和ケアの専門家でなくても理解しやすいよう配慮して書かれており、執筆された先生方の熱意を感じる力作揃いであった。章立ても疼痛緩和などの症状コントロールのみなら

ず、実地診療でしばしば問題となる“褥瘡”や“口腔ケア”など類書ではあまり取り上げていない内容にも頁を割いている点も嬉しく感じた。また、後半の“抑うつ”、“家族と癌”、“予後予測”、“癌告知の手順”は非常に参考になった。というのも、特に緩和医療を要する患者さんと接していて最も心を砕く精神的ケアに関しては、これまでの教科書の記載には何となくなじめない違和感を感じていたからだ。これは、筆者が不勉強なだけかもしれないが、従来の教科書の多くが欧米の翻訳であったり、また、海外の文献の受け売りだったりするためではないかと考える。つまり、キリスト教文化を背景とした欧米の方法を、精神的なバックグラウンドが全く異なる日本の患者さんにそのまま実践するには少し無理があったのではないと思われる。しかし、本書には日本の医療現場の実情や日本人の生活様式・人生観などの実際に則した具体的な記載が随所に光っており、これまでの緩和医療の教科書にない新しさを感じた。

最近では告知率の上昇やインフォームドコンセントの普及に伴って、自らの意志で終末期を家で過ごす

という選択をする患者さんも増えている。このことにより、地域のプライマリケア医も外来や在宅をベースとした緩和医療を実践する機会も少なくなっている現状がある。

本書に 1 つだけ要望を言わせていただければ、一般医を対象にした本書だからこそ、外来診療や在宅診療における緩和ケアの視点から書かれた論文を入れていただきたかった。この点だけは次版での追加が望まれる。

とはいうものの、本書は、緩和医療が一部の癌専門医師やホスピス病棟で働く人々だけのものではなく死に直面した患者さんに接するすべての医療スタッフに必須の普遍的な臨床的見識であることが自然に伝わってくる良書であった。手ごろな分量で肩の力を抜いて気楽に読める一冊でもあり、最前線の一般医のみならず、癌の患者さんを担当しながら研修しているレジデントや実際の緩和ケアに携わる看護婦さんにも、ぜひ一読をお勧めしたい。

● A5 頁 200 図 34 カラー写真 11 表 37 2000 定価(本体 3,700 円+税) 円 400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)